

「必要とされる幸せとは」

校長 安藤 徹



早いものでもう2月に入りました。今日2月1日時点では3年生が卒業するまでの登校日数もわずか「23日」・・・というところまできました。いよいよゴールが見えてきましたね。それでも、あと23日間の岩戸支援学校での学校生活で3年間を振り返りながら、ゆっくり過ごしてほしいと思います。

7日には「職業製品販売会」が予定されています。生徒たちがこの1年間、職業の時間に製作してきた製品を実際に見て、製品に触れることでそのがんばりを感じていただけたらと思いますので、ぜひご来校ください。

ところで、話は変わりますが、昨年12月の2学期の終業式に私は「人権」ということについて生徒のみなさんに少し話をしました。その際に「人権というのは誰もが悲しい気持ちやいやな気持ちにならずに、『幸せに』生きる権利のことです」と説明をしました。そこで、人間であればだれもが望み、そのようにありたいと願う「幸せ」ということについて今回はもう少しお話をしたいと思います。

みなさんは「幸せ」という言葉を聞くとどんなことを思い浮かべますか？ある人はお金持ちになること、ある人は社会に出てえらくなること、ある人は勉強や運動が得意なこと、健康なこと・・・など、人それぞれだと思います。辞書であらためて調べてみると、「心の満ち足りた状態、運が良いこと、良いめぐりあわせ」などと出ていますが、私は「幸せって何だろう」ということをふと考えた時に、必ずこの話を思い出します。

それは、みなさんもテレビなどでもたびたび取り上げられているので、ご存じの人が多くとは思いますが、大阪に本社がある日本理化学工業という主にチョークを製造している会社でのことです。



この会社は今では「日本で一番大切にしたい会社」といわれる会社でもあり、あるテレビドラマの原作になった会社でもあります。よく知られているようにこの会社で働いている社員の約7割が知的障害がある人なのですが、このように多くの障害者が働くようになるのにはあるきっかけがあったそうです。それは、今から60年以上も前の昭和34年に、ある特別支援学校の2人の卒業生を就職させてほしいとの申し出に、その当時は障害者の雇用に半信半疑だった先代の社長である大山さんが「正式採用は難しいが、2週間の職業体験であれば・・・」ということで2人を引き受けるところから始まりました。

2人の学生が2週間の体験を終えようとするころ、ある一人の女性社員が社長のもとに来て、「勤務時間中にむだ話もせず、お昼の時間のベルが鳴っても黙々と一生懸命に作業し続けるあの2人がうちの会社には必要です。ぜひ正式に雇ってください。これは社員全員の気持ちです。」とお願いしたそうです。

その時に社長の大山さんは「施設や作業所などにいればもっと楽な仕事ができるのに、どうしてわざわざうちの工場で働こうとするのか？どうしてそんなに一生懸命働くのか？」と不思議に思い、あるお寺の住職さんに尋ねたそうです。その住職からは「人間の幸せは、物やお金ではなく、人にほめられること、人の役に立つこと、人から必要とされること、人から愛されること、この4つだ」と聞かされ、社長さんは「働くということは時にはつらいこともあるが、無心、夢中になって働くことをとおして幸せになっていくことが大切」だということを知り、2人を採用し、それからずっと60年以上にわたり多くの障害者を雇い続けてきたということです。

何事にも一生懸命取り組み、それを誰かに認めてもらい、そして必要とされることこそが私たち誰にとっても何よりもの「幸せ」だということをいつも忘れずにいたいものです。

令和7年2月1日